

## 編 集 後 記

### 信頼と「チームワーク」

「チームワーク」という言葉が使われてひさしい。NST（栄養サポートチーム）や褥瘡チーム、等々、枚挙にいとまがない。インフォームドコンセントまでチームとしてやるべきだ、という。それは医療そのものが医師とともにさまざまなパラメディカルから成り立っていることを表現しているにすぎない。中心は患者さんであり、その抱えた疾患である。それを治療するために全員が力を尽くすチームなのである。

しかし、「チーム」という言葉が安易に使われているかもしれないということには、現場の関係者は常に注意を払うべきであろう。外科医が患者を手術するときには、外科のチームで行う。大学の場合、それを管理する教授以下のスタッフがおり、術後合併症が起ればみなでその対応を考えるのである。合併症の軽重もさまざまで、机上に上がらないものから、ミーティングの時間を割いてうんうん考えても、治すのに何ヶ月もかかることもある。逆に、その何ヶ月の間に再手術などを戦略に入れ込んで、やっと治し終えた感慨はひとしおである。この場合には、外科医相互の信頼感が最も重要である。長引く合併症の患者をしばしばカンハランスの俎上にあげて検討するのは、あげる上司も大変だが、合併症を作った外科医チームの面々、特に執刀医はたまったものではないだろう。教授は自分に意地悪をしていると勘違いしてしまうこともあるだろう。けっしてそんなことはなく、教授は患者をなんとかして治したい一心なのである。この点で外科医と外科医、教授と医局員の相互理解がないと最良の治療はできない。うまくいかなければ俗な言葉をあえて使えば「仲間割れ」の様相を呈し、患者の命に関わってくる可能性もある。

つまるところいい治療をめざした「チーム医療の」根幹はこの人間同士の相互の究極の信頼なのである。「信なくんば立たず」ということである。

編集委員長 木 村 理（平成26年2月記）